

第636回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2021年9月度 ——

◇ 開催日

2021年9月21日(火)

◇ 議題

<ディスカッション>

「ジェンダー平等のためにテレビのできること」

※第90回系列番組審議会委員代表者会議 議題

今回は、福岡県の緊急事態宣言が延長されたことを受け、委員長以外の委員はWEBのテレビ会議システムを利用したリモート参加とした。

九州朝日放送株式会社

第636回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2021年9月21日(火)午後4時00分～5時30分
2. 開催場所 九州朝日放送 本社役員会議室
及び福岡県の緊急事態宣言が延長されたことを受け、委員長以外の委員は、WEBのテレビ会議システムを利用したリモート参加とした。

3. 委員の出席

委員総数 8名
出席委員数 7名

委員長	戸田 康一郎
副委員長	赤木 由美
委員	守田 有理子
委員	石橋 和幸
委員	藤村 まこと
委員	丸石 伸一
委員	石井 靖子

欠席委員数 1名 (レポート代読)

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣 靖
執行役員	岩村 智
報道情報局長	柴田 高宏
総合編成局長	大保 一
報道情報局 マネージメントセンター長	松尾 恵美
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	園田 哲也
番組審議会事務局 (視聴者・広報室)	松永 俊郎

4. 議題

- (1) ディスカッション「ジェンダー平等のためにテレビのできること」
※第90回系列番組審議会委員代表者会議 議題
- (2) 福岡・佐賀の大雨特別警報発令に伴うKBCの報道対応について
- (3) 9月・10月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (4) 7月・8月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (5) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- これまで「男性らしく」や「女性らしさ」という言葉にあまり違和感を抱かずにいた背景には、過去の歴史が深く関わっている。幼少期から周囲の大人に「らしさ」という言葉に対する考えを刷り込まれてきたからではないか。テレビも長くジェンダーバイアスの刷り込みに関わってきたと思う。
- テレビを付けると若く美しい女性が映し出されることが多く、外見的な期待がテレビ画面に凝縮されているように感じる。海外では性別も体型もユニークな人が活躍しており、日本でも幅広い人にアナウンサーやキャスターとして活躍して欲しいと思う。
- 単にジェンダー平等と反する発言を批判するのではなく、不平等な考え方が時代や文化に適合していないことを伝えることが重要だ。「ドラえもん」がアメリカで放送された時、しずかちゃんの持ち物が人形から本に変更されたような積み重ねが重要だと思う。
- いつでもどこでも取材に行ける男性記者を優秀とする風潮があったが、今後は子育てと仕事を両立しながら生き生きと働く女性の事例を紹介したり、新たなライフワークを題材にしたテレビドラマを制作してはどうか。
- テレビの仕事は時間的にも体力的にも過酷なことは知っているが、女性の活躍を目指すうえで、テレビ局自身がどのような認識を持ち、どう変わろうとしているのか、対外的に示すことも大事ではないか。数値目標を定め達成状況を「見える化」してはどうか。
- 「アサデス。」などKBCの情報番組では、MCやコメンテーターの男女バランスを意識していることがうかがえるものの、進行は「男性アナウンサーがメイン」「女性アナウンサーはサブ」と感じることもある。ニュース解説など専門的な役割は依然として男性が高い比率を占めており、まだまだ改善の余地がある。
- 伝統的な性役割やジェンダー観を否定はしないが、「押しつけ」にならない努力も必要だ。偏見を広げず、新たなジェンダー観や多様性の提示もテレビの役目だと思う。みんながありのままの個性を受け入れることができるように、テレビには必要以上にクローズアップすることなく自然体での発信が求められる。
- 日本や世界で起きている性別による社会的、経済的差別の現状を伝え、ジェンダー平等に取り組む企業の好事例を紹介するなどして、差別のない社会づくりへ警鐘を鳴らすこ

ともにも挑戦して欲しい。

- 夫婦別姓やLGBTQ等が抱える問題をメディアが議論するようになり、社会もマイノリティーの権利を認めつつある。大事なことは国民一人ひとりの意識改革。少しずつ変化を生じさせる力を有するのがメディアであり、とりわけ国民が一番身近に感じるテレビの役割だと考えている。
- ジェンダーバイアスを含む番組では「この番組の中にはジェンダーバイアスがかかった内容が含まれています」とテロップで伝えてはどうか。そうすることで視聴者は意識して番組を見るようになるだろうし、制作側の意識も変わるのではないかと思う。
- テレビ局がアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）をもっと知り、番組づくりにあたることに尽きるのではないか。放送局は、性別や年齢を問わず、個人の能力や強みを生かす組織運営に努め、一方で様々な人や企業の取り組みを幅広く紹介し、ジェンダー平等の実現に貢献して欲しい。
- 制作者に十分な学習の機会を得てもらい、ジェンダーについての感受性を養う機会をテレビ局や関連団体が提供することが求められる。テレビ局関係者がジェンダーへの理解を深め、働き方をジェンダー平等に近づけていく必要があると思う。
- 年齢が高いほど意識が低く、若年層の方がジェンダー平等に対して高い意識を持っているのではないか。今回の課題は、むしろ若い世代に投げかけ、意見や考えを聞くことにより、新たな視点やアイデアを得られたのではないかと思う。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 演出上のやむを得ない場合を除き、キャスター等出演者における男女比率の数値目標など、改善に向けて進めていく必要性を感じている。
- 番組制作の現場において「残業をする人が偉い」「こだわった作品を寝ずに制作する」という風潮があったが、子育て中の女性プロデューサーが改善を模索したところ、大勢の女性スタッフを中心に理解と協力を得て改善が図られたということもある。
- 従来の放送局は、泊りシフトや24時間態勢といった面から男性が採用される傾向が強かったが、こうした傾向もアンコンシャスバイアスと言える。改善に向け、「女性活躍推進法」に基づく行動計画を現在策定しており、併せて「働き方改革」も推進するなどして、女性も活躍できる土壌を少しずつ整えている。
- 本当の意味でのジェンダー平等とは、家庭でも仕事でも実践されるのが理想だと思うが、現状ではなかなか難しい面もある。仮にいまの世代での解決は難しかったとしても、それを踏まえて次の世代が働きやすい環境にできるよう、その足掛かりになることが自分たちの使命ではないかと考えている。
- 各部署の代表者を集めた「みんな活躍計画プロジェクト」を実施し、会議やアンケートを行っている。アンケートは現在集約中だが、とても興味深い内容。まさにいま、アンコンシャスバイアスに気づく局面に立っているという状況。

などの説明をしました。